佳作

見送り、ありがとう

福岡県
福岡市立東月隈小学校 五年
是永 一樹

七月のある日曜日、ぼくは父と姉の三人で年に一回の、町内会の清掃活動に参加しました。毎年両親が参加していますが、今年は母が用事で行けませんでした。そこでぼくと姉が行くことにしたのです。

とても暑い中、草むしりを頑張っていると、

「君たちのお母さんは立派だね。」

と、近所のおじさんに声をかけられました。ぼくが汗びっしょりになって頑張っているのに、どうして母がほめられるのか、不思議に思っていると、おじさんは

「君たちのお母さんは、毎朝登校する君たちを、姿が見えなくなるまで、庭から見送ってるやろ。そんなお母さんは、なかなかおらんよ。」

と、にっこり笑って言いました。ぼくは暑さを忘れるくらい、びっくりしました。ぼくにとっては当たり前のことだったからです。

言われてみれば、母は毎朝ぼくを見送ってくれます。ようち園の時には、スクールバスが見えなくなるまで、手をふってくれました。小学校に入学してからも、ぼくと姉の後ろ姿を、ずっと見送ってくれました。今年の春から姉が中学生になったので、家を早く出るようになったけど、一人ずつちゃんと見送ってくれます。暑い日も、寒い日も、雨の日も、毎日です。家からまっすぐ歩いて、曲がり角の所で振り返ると、豆つぶくらいに小さくなった母が、大きく手をふってくれます。ぼくも力いっぱい手をふって、角を曲がります。

その日の晩ごはんの時、母におじさんの話をしました。すると母は

「それはお父さんのおかげよ。お父さんがお母さんの分も働いて来てくれるけん、お母さんが朝ゆっくり見送ってやれるとよ。だからお父さんを立派に育ててくれた、おじいちゃんとおばあちゃんにも、感謝せないかんね。」

と、言いました。でも父は、

「いやいや、いくら時間があっても、気持ちが無かったらできんけんね。お母さんの優しさと、そういう人に育ててくれたおじいちゃんとおばあちゃんのおかげぞ。」

と、言いました。姉がニヤッと笑って

「ヒューヒュー。お父さんとお母さん、ラブラブやん。」

と、ひやかすと、母が

「当たり前やん。うらやましかろうが。」

と、自まん顔をしました。家族四人がドッと笑いました。ぼくは何だか、とても幸せな気持ちになりました。両親にも、おじいちゃんおばあちゃんにも、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとう。

清掃活動は暑くて大変だったけど、おじさんのおかげで大切な事に気付くことができました。二学期からは母の見送りに、家族みんなの思いやりを感じることができそうです。この思いやりに見送られて、これからもありがとうの心で頑張ります。